

研究ノート

幼児の感性を育む保育内容のあり方を考える ～身近な自然を保育に生かす～

On the content of nursery education for refining children's sensitivity
through contact with their immediate natural surroundings

前田美智代

要約：近年、幼稚園での保育内容が多岐にわたっている。学校の学習を思わせるような読み書き計算・英語等のお勉強保育があるかと思えば、屈強な精神作りと称してアクロバットの運動保育がなされている園もある。この傾向の保育は覚えることや教えられたことを間違いなくこなすことが先行し、できるかできないかの結果主義に陥りやすいと危惧する。覚えたり教え込まれたりした経験は時間と共に忘れていくことも多い。周知の通り幼稚園は幼児の心身の調和的発達を目的とする教育機関であり、特に感情の発達、心の育ちに重点が置かれている。「どうしてこうなるの、不思議だね」と思えるような体験こそ子どもが主体的に生きていくための力になると考える。子どもの発達課題や子どものものの見方・感じ方を理解した保育内容の創造により子どもの心の発達は期待できる。そこで着目したのが自然環境を幼稚園教育に取り入れることである。本稿では身近な自然環境を保育に取り入れて実践している園の事例を基にしながら、子どもの心の発達の過程を探り、子どもの心と体を共にそだてる保育のあり方を深く理解する。

Key Words：心身の調和的発達、感情の発達、発達課題、日本人と自然観、自然と保育

はじめに

幼児教育に自然を取り入れるために、日本・日本人の自然観を知る必要がある。日本の四季の素晴らしさは誰もが認めるところである。また、自然と人間の関係は深いことも承知である。しかし世界では地域により自然に関する考え方が異なる。では日本人の自然観はどのようなものであろうか。小倉寛太郎は『自然に生きて』¹⁾で「自然保護運動がおこっている。これ自体は悪いことではないが自然を保護するというようなおごり高ぶったものの考え方がある以上それは本物ではない。」と書いている。また、河合雅雄も『子どもと自然』²⁾の中で「ヨーロッパの森は破壊し続けられ、ほとんどなくなってしまった。自然は人間の対立物としてとらえられ人間によって支配されるべき対象であった。」と記し日本人にとっては、自然は人間の対立物でもなく、ましてや支配する対象でもなかったことを明らかにしている。自然は人間をとりまくごく当たり前のものであり、人間の力ではびくともしないのが自然であり、人間は自然に包まれて

生活していると認識することができる。

さらに『季節と暮らす 365 日』³⁾には「日本には春夏秋冬の四季の移り変わりがありその恵まれた自然環境のなかで培われた情緒感がある。」との表記がある。ここからも自然と共存しながら豊かに生活するという日本人的な自然観を知ることができる。こうした自然観に立脚し幼児教育に自然を取り入れることは、子ども達の感情の育ち・心の成長に大きな成果をもたらすであろうことは予測できる。しかし、自然を幼稚園教育に取り入れるには、ひと工夫必要である。それは大人が考える大きな森林のことや高い山のことではなく、子ども達のごく身近にある、子ども達の手にあった自然で遊ぶことにより情緒が涵養されると考える。子どもと自然の関係について広岡キミエは『幼児の内面を育てる』⁴⁾で終戦当時の保育現場の状況を次のように回想している。教材教具の類もなく保育者だけが全環境というなかで保育者は体当たりの保育をしていたこと、室外では鬼ごっこ・かくれんぼ、室内では歌をうたうかお話をすることで、またしても保育のネタは切れること等。それだけにその後の復興のなかで草花・小虫や生き物と出会うことができたことは大きな喜びであったに違いない。広岡の推奨する幼児の

内面を育てる保育にならって、子どもが幼稚園でどのように自然と関わっているのか次の項で述べたい。

1. 幼稚園の保育に身近な自然を取り入れる意義

幼稚園における自然の保育は何も今に始まったことではなく大正時代にすでに行われていた。『日本の幼稚園』⁵⁾によると特に阪神間で多く実践されていた。園舎をもたず、子どもを自然のなかに放ちのびのびと育てるというものである。斬新で子どもの心を解き放つ保育であったにちがいない。しかしその後は社会の変化により自然の保育は衰退していった。現代でもひと工夫すれば子ども達の興味や関心に合致した自然の保育は可能である。幼稚園で自然を取り入れているところでは次のような流れで保育が行われている。

(1) 入園当初の子どもは、おもちゃにすぐ飽きる

入園当初の子ども達は、大変不安定であり担任の保育者を頼りにしながら日々過ごす。担任はそれぞれの子どもの様子を見極め、子どもの興味や関心ごとを探りながら幼稚園生活に馴染ませていく。保育室で積み木や絵本・おもちゃ等で遊ぶ子ども達と行動をとるがこれらの遊びはすぐに飽きてくる。そんな時、園庭に誘い出し花壇の花を見たり花に寄ってくる蝶や小虫を見たりして気持ちの安定を図るとどんなに泣いている子どもでも目の前で虫が動くとじっと見入ったり、手を出したりして遊びだす。

(2) 保育者は子どもを自然に出会わせる支援を

保育者は子ども達が示した淡い興味を捉えて虫を捕まえたり、花をつんだりして一緒に楽しむと思いのほか子ども達は集中する。たくさん見つけたダンゴ虫に名前をつけたり、お父さん・お母さん・赤ちゃん・子どもなどとまるで家族のように思ったりする。その後はダンゴ虫になって体を使って表現を楽しむと、子ども達の心にはダンゴ虫が一層身近な大切なものに思える。こうして自然のある幼稚園では、子どもたちがごく普通に自然と接触していく。やがて小虫と遊ぶことが主流となり、話し合いも身振り表現も子どもの見た虫や草花のことで賄われる。その生活はチョウ、ハチ、カエル、ザリガニ、アリ、ツバメと続く。

広岡キミエは『ごっこ遊びから劇遊びへ』⁶⁾で「小虫が子どもの目に留まり、興味の対象になるのは動く面白さについていけば小虫たちは色々な姿を見せてくれるからである。」と記している。子ども達はその姿に触れ、やがて命があることに気づいていく。自分の目で確かに

見たり、手で触ったりした感覚から生きて生活する姿をみせてくれる虫に次第に深い興味を抱き、自分の気持ちをそこに投入する。それこそが感情の育ちに直結する保育であり、筆者はこれが保育の原点と捉えている。

(3) 子どもが小虫を気に入るわけ

子どもは動くものが好きであり生きて動く小虫たちに子どもの心は呼びさまされる。子どもが小虫を気に入るのは、機械的な固定した動きではなく、変化に富んでいるからである。追えば逃げる、かくれる、餌を食べる、働く、休む、生活がある、生命の動きがあることが子ども達の心に訴え共感を呼ぶものと考えられる。先述の通り子ども達はダンゴ虫を見ただけでそこに自分の家族と照らし合わせて見ることもある。こうしたアニミズム的な心情を持つ幼児にとってこの相手は最適である。子ども達は虫たちと遊びそれによって心の全体を太らせていくことになる。

(4) 自然でしか学べないものがある

作家の大平光代は『陽だまりの時間』⁷⁾で「自然に触れさせることでしか学べないこともある。」語っている。自然の中で遊ぶことや体を使うことを体験させなければそのおもしろさもわかりようがなく教えられて分かることでもない。自然との様々な経験を通して時には尊い命を落としてしまう経験や手痛い経験もしながら、子ども達は自然との付き合い方を知っていくと考察する。

次に具体的に幼稚園では自然をどのように取り入れているのか、年間を通しての位置づけについて考えておくことが重要である。

2. 実践保育の中から

(1) K市B幼稚園の年間保育と自然の位置づけ

B幼稚園では、保育と自然の位置づけを神谷栄司『幼児の世界と年間保育計画』⁸⁾に基づきB幼稚園の独自のものの下記のとおり年間計画に盛り込んでいる。しかし、あくまでも子どもの興味や関心事とのかかわりでの計画であり、計画が最優先されるものではなく子どもの実態に即して変更する場合はある。

年間保育における自然の位置づけ

	自然の保育	お話の保育
4・5月	小さな自然の世界（園庭で。小虫と花 テントウム虫、ハチ、チョウ）	身近な自然の話
6月	中くらいの自然の世界（ツバメ・池の中のカエル・ザリガニ）	生き物にまつわる話
10月	大きい自然の世界（どんぐりや木の葉を通して秋を感じる）	秋の自然の話 秋を感じるためには不可欠
12月	個々の現象を取り上げる（霜・風・氷・雪）・自然の回想	目標は自然を理解することと文学を味わうこと
1月	・自然の回想（春・夏・秋・冬） ・自然は文学に従属	劇遊び・劇づくり 目標は文学を味わうこと

(2) K市B幼稚園 平成22年6月19日 ツバメの保育 5歳児

B幼稚園の5歳児クラスの設定保育はツバメをテーマにしたものであったが、そこにはツバメの飛行について、子どもらしい言葉がたくさん出てきた。「(子ツバメのエサに虫を捕まえる)親ツバメは虫の飛び方のまねをして虫を捕まえる」。「上飛び」(高いところでの飛び)、「ぎりぎり飛び」(地上すれすれの飛び)、「よけ飛び」(門や樹などの障害物をよけた飛び)等々。子ども達は自分が思った感じたりしたことをストレートに飛び方の名前にした。それらの発言が設定保育のなかで飛び出し、違和感なくクラスの中で通じ合っている。そして保育者にも尊重されている。

① ツバメを見た経験を生かす

ところがそれを最初に口にした子どもはどのような場面を見て、そのように感じたのだろうか。「上飛び」や「よけ飛び」といったツバメの様子を見たわけではなく、近くのツバメの巣を見た経験から、餌をとる親ツバメはこんな飛びをしながら餌をとっているのではないかと想像したのであろう。そこには子ども達のツバメへの愛着が感じられる。そして公開保育までの間にクラスで共通に理解し合ったのかもしれない。子ども達の想像の世界を自由に広げてやればよい。

② ドラマの種が含まれた遊び

これらの言葉のなかにドラマの種が十分含まれている。そうした飛びがツバメの保育の最後のまとめのなかに生きていけばそれはすでに立派なドラマである。どのように生きていくかは子ども達と保育者がこれから創造していくことになる。この日の保育に限らず子ども達は日常的にツバメに深い興味を抱き、実際にはえさ取りの場面を見ていない子どもも多いが、そこは想像しながら、ツバメに対する子ども達の思いの

表現であると解釈できる。個々の子どもが何にもものもとられず、自信をもって自分流に飛びの命名をしたことに感心する。そこには単なる思いつきではなく子どもなりの想像力を駆使しての思いであることが感じ取れる。

③ 継続して自然を見る

B幼稚園では、色々な自然と向き合いこの研究会以前にも、その後も子ども達は小虫や草花とも触れ合ってきている。保育者は子ども達の自然への思いを大切にしてい保育を行っている。そして秋にも秋の自然に触れた保育を実践している。

(3) K市B幼稚園 平成22年11月12日 木の葉の保育：5歳児クラス

9月下旬になると虫などは姿を消し、代わって木の実や木の葉が登場する。子ども達は登園途中に拾ったどんぐりや木の葉をポケットにしよばせて園に持ってくる。闇雲に収集するのではなく、自分が気に入った木の実や葉っぱに目を留めて収集している。保育者も子ども達の素朴な葉っぱへの思いを大切に受け止めて、話し合いをしたり、木の実や木の葉になったりして身振り表現を楽しむ。

次の事例は近くのH山に遠足に出かけ、その翌日皆で話し合った内容である。

(山の葉っぱみつけた)

保護者のことば	幼児のことば
・バスから降りて葉っぱ拾ったね	E児：星みたいなオレンジ F児：ギザギザになっていた G児：こんにちはの葉っぱがあった。
・G君の葉っぱ何のこと？	A児：棒がついて(葉柄の意味)はっぱが丸まっていた
・誰にこんにちはって言っているの？	A児：幼稚園のみんなに A児：穴あき葉っぱもあった
・何で穴あいたの？	子どもたち口々に ・アリが食べた ・虫に食べられた ・おいしいから
・葉っぱさん虫のご飯？	(多くの子どもがうなずく) ・赤いからおいしい
・はっぱの上歩いたら音がするって聞いていたね	J児：カサカサ・コソコソ
・それって何のこと？	K児：踏まんといて L児：踏まれていたいから
・だからみんなそとと歩いていったのかな？	(全員うなずく) C児：葉っぱの下にカエルがおった
・先生も知っている。カエルさん何であんな所にいたのかな？	(口々に言う) ・葉っぱの下で眠るの ・もうすぐ冬だから ・寒くないように葉っぱかおる ・寒くなってきたから葉っぱのおふとんかおる ・雨とかにカエルが濡れないように ・風邪ひかないように

① 実体験したことを表現する

こうした手法によって、葉っぱをより深く心に刻むことができる。B幼稚園では、秋の遠足で蛙が葉っぱの下から出てきたところに出くわしている。子ども達は蛙がこれから葉っぱのおふとんで眠るのだと想像することができた。やがてこの先、木の実ハリスの大切な食べ物になることや、散った葉っぱが小さな虫や木の実のおふとんになってあげるのだと更にイメージを広げていくことだろう。

② 実体験が子どもに及ぼす影響

実体験は何よりも子ども達に説得力を持っている。この時期には保育者は実体験とともに、童話や身辺話などを織り交ぜながら静かになった自然界を想像する夢作り・思いを深めることへと導いていく。子ども達は自然と遊びながら季節の移り変わりを無理のない形で実感していく。歳時記などを読むと昔の日本人は移り変わる四季の繊細な風景や情緒をどう見ていたのかが感じ取れる。今年の夏は猛暑日続きであった。地球温暖化が進む今だからこそ、子ども達にもその不思議さを知ってほしいと思う。そこから日々の生活の仕方を工夫し、自然が多くのお楽しみや豊かさを感じさせてくれることを子ども達に是非伝えたいと考える。

3. 18歳、19歳学生の自然観

(1) 忘れかけた自然への思い

幼児の感情は、身近な自然に触れ合うことによって育てられることはわかってきた。

では、日々出会っている学生はどのように自然をとらえているのか、学生達の幼児期の過ごし方を知る手がかりの一端を知りたいと考えた。以下は学生がキャンパスで見つけた事を、自分の思いも加味して書いたものである。(平成20年5月13日)

A：学生ホールの小さな電球。ぼつりぼつり小さな光が
 蛍みたいで、優しい気持ちになりました。

B：運動場に並んでいる木。晴れの日には太陽の陽をたくさん浴びて運動している学生をながめている。風の日にはサラサラ葉っぱがかさなって自然の音を奏でている。雨の日には水浴びをしてちょっと一休み。毎日のんびり生きているみたい。

C：水たまりがあった。のぞいてみると自分がうつった。自然の鏡。じっとみつめているとそのまますいこまれそうになった。

D：雨がポトンポトンと誰が早く地面に着くか競争して

いる。

E：一本の花を見つけたよ。下を向きながら雨に打たれるたびに僕におじぎをしてくれた。

電球を蛍の光りに見立てることができたり、葉っぱの揺れる音が音楽に聞こえたり、雨粒のおちる様が競争していると思えるなど、その心根に夢を感じる。おそらく幼少の頃に培われた感性だろう。今後もこの感性を一層磨き続けてほしいと願う。

(2) 幼児期に自然に対する感情が刷り込まれる

河合雅雄は『子どもと自然』⁹⁾の中の「幼児期から自然に接し日頃自然について語っておれば、自然に対する親しみの気持ちがいつの間にか心の中に刷り込まれ、生涯持続するだろう。」の言葉を感動的に受け止めた。そして次のことを重ねて記述しておきたい。最近ゲームや携帯電話など物との対話が多く、自然との直接経験が極端に少ないように感じる。自然へのかかわりを面倒と感じてしまう生活が先行している節もある。その結果、命との対話が減少し感性は潤いを失って味気のないものになっていくことが心配である。

(3) 自然が育てる人間の感情

しかし生活の仕方によっては、感性を磨くことが出来ることは間違いなく、その近道は人間の方から自然に近づき、親しみをもつことではないかと改めて感じる。

今年のように猛暑が続く年は、何か大きな異変が起こるのではないかと恐怖すら感じる。10月中旬になってもツクツクボウシの鳴き声が聞こえたり、秋なのに衣服は夏物を装っていたりして人々の様子もいつもと違う。ようやく日は巡り、短い秋が過ぎ冬の到来を迎えた。この経巡りを感じながら子ども達も大人と一緒に生活の仕方を学んだはずである。ここには物との対応だけでは得られない自然の不思議さがある。深く考えること、感じること、怖がったり、喜んだり、祈ったりする感情が自然によって育まれるのであろう。

おわりに

実践例を通して保育を考察すると、幼稚園の保育内容に自然を取り入れることによって、子ども達の心の発達を促すことは間違いないと実感できる。中でも子どもと大人の自然に対する対象が違うことを学ぶことができたのは大きな成果であった。子ども達は身近で小さな自然から徐々に感じる心が育ち、次第に大きな自然への思いが育成される。子ども達の発達課題に即して保育を進めることの重要性も感じる事が出来た。秋田喜代美の『保

育のおもむき』¹⁰⁾で「自然が感じさせる歳月などは、短時間で刹那的快樂になれている現代の子ども達にゆったりとした時間のながれや期待して待つという経験を育ててくれる。」の文章に触れて思い出すことがある。自然を体験させなければならないと無理をして遠出する必要はない。筆者が幼稚園現場にいた時に、保護者に向かって、ゴールデンウイークや夏休みなどに自然の中で遊ぶよう呼びかけたところ「〇〇山にドライブに行ってきました。」とか「△△湖に行って野外パーティーをしました。」などと返事が帰ってきた。それも悪くはないが、筆者が伝えたかったことは家の近くの河川敷や公園で、そこに植えられている木や草花を観察するのも楽しい。場所によっては野鳥、蝶やトンボなども目にする事ができるという意味であった。少々、説明不足であった反省したことである。めまぐるしく変化する現代社会で次々新種のゲームや遊具が現れるとそれに心奪われる傾向が大人にも子どもにもある。地味で何の変哲もない身近な自然に心を留めるという生活は、薄れてしまっているのかも知れない。急がずゆったりと自然とむきあうことによって知らなかったことを知る機会になったり、面白さを感じたりすることができる。

年間を通してその時々自然に触れることにより、多くの感性を育むことができたのは、そこには子どもが主体的に自然とかかわり、試行錯誤しながら自分なりに納得したり理解したりするからであって、人にあれこれと言われるからではない。興味や関心事はそれが子どもにとって本物になるには時間を要するのである。日にも日にもどんぐりを持って来る子ども。木々の葉の色付きを毎日報告に来る子どもたちには、それが不思議であり、心がそそられるのである。それが楽しみになるから継続してみたり考えたりするのであると解釈できる。園によっては自然と言うとすぐに図鑑や本を用意してその知識を得させようとするところがあるが、遊びの中で、日々の園生活の中で自然を生かして楽しむという生活が必要であろう。そして観念的な見方ではなく自分流の見方をしながら人の意見や思いにも心を傾け、時に〇〇さんと同じだと思ふ気持ちを抱き、人と寄り合うことも出来るようになる。自然を通して人とのかかわりや社会とのかかわりを自分なりに身につけることができる。それが幼児教育の真髄であると確信する。

引用文献

- 1) 小倉寛太郎 (2010)「自然に生きて」P170 新日本出版社
- 2) 河合雅雄 (1990)「子どもと自然」P 226, 227 岩波新書
- 3) 日本気象協会 (2009)「季節と暮らす 365日」P 145 アリス館
- 4) 広岡キミエ (1998)「幼児の内面を育てる」P 79 ひとなる書房
- 5) 上 笙一郎 (1965)「日本の幼稚園」P 153 光文社文庫
- 6) 広岡キミエ (1998)「幼児の内面を育てる」P 19 ひとなる書房
- 7) 大平光代 (2010)「陽だまりの時間」P 80, 81, 82 中央公論新社
- 8) 神谷栄司 (2003)「幼児の世界と年間計画」P 11 三学出版
- 9) 河合雅雄 (1990)「子どもと自然」P 222, 223 岩波新書
- 10) 秋田喜代美 (2010)「保育のおもむき」P 18 ひかりのくに株式会社

